

山と自然のサイエンスカフェ@信州(令和8年度)

Report

第1回

「シカの侵入と気象の変化で
高山蝶はどうなるか」

日時：2026年6月5日(金) 17:30～19:00

会場：くらしふと信州(オンライン併用)

参加人数：対面11名 オンライン29名(合計40名)

令和8年度第1回サイエンスカフェ(通算68回)でお話しました。

気候変動は1992年の地球サミットで世界の共通課題となりました。それから30年余り。2023年からの3年間は、観測史上最も暑い年になりました。かつては未来の話にも思えた温暖化が、現実に出てきたという感想をお持ちの方も少なくないのではないのでしょうか。

高山蝶は、ライチョウや高山植物とともに高山のシンボルとされてきました。その高山蝶に、近年の環境変化はどう影響しているのでしょうか。

戦後、田淵行男の写真集で注目を集めた本州の高山蝶は、亜高山帯から高山帯に生息する9種をさすとされます。これらは寒冷な氷期に大陸から移入し、温暖な間氷期を高山で生きのびたことが、DNAの研究などからわかっています。数万年から数十万年の環境変化を生きのびた蝶が、近年の変化で本当に危機に瀕するのでしょうか。

実は温暖化と並ぶ脅威に、ニホンジカによる高山植物の摂食被害があります。雪解け後に山に登るシカたちのため、植生の衰退が目立つ地域が南アルプス、ハケ岳を中心に近年広がっており、その影響は北アルプスにも及びはじめています。高山蝶は、幼虫の食草や成虫の吸蜜植物を通じて、シカの被害の影響を受けるおそれがあります。加えて、温暖化によりハイマツがそれらの植物を覆うと、さらに生息環境が狭まります。タカネヒカゲハケ岳亜種では、これらの影響が指摘されており、対策がはじまっています。

温暖化の影響には、複雑な面もあります。日本の高山帯での気温の上昇傾向は、そもそも気候変動の研究で必要とされる数十年以上の観測データがほとんどないため、不明瞭とされています。けれども短期の異常気象も、蝶にはダメージとなる可能性があります。昆虫は、異常な高温では死亡率が高まります。チョウ目では30度前後からこの高温障害が発生することがわかっています。一方、気候変動は高温、大雨などの極端現象を増加させることが知られており、それは長野県でも確認、予測されています。2025年には浅間山系でミヤマシロチョウが激減したと報告されました。この年の猛暑は、人為的な温暖化がなければ生じえないレベルのものであったことがわかっています。このように、高山蝶は高温などの極端現象に弱く、シカによる植物への被害と相まって複合的なリスクに直面していると考えられます。

このような話題提供に、会場、オンラインの双方から熱心にご質問をいただきました。猛暑は体感しやすく、熱中症なども影響を受けやすい現象です。気候変動の影響は、長期的な傾向だけでなく短期の極端現象の面からも、今後さらに注目していくことが望まれるのではないのでしょうか。

(須賀 丈・尾関 雅章/自然環境部)

タカネヒカゲハケ岳亜種

